

西海区水産研究所を「せいかい」と読む理由

嶋津 靖彦

昭和41年に東海区水産研究所に入所して以来、筆者は西海区水産研究所を「せいかい」と読むことに何の抵抗も感じたことはなかった。ところが、平成12年4月に長崎に着任して以来、どこを見ても「西海」は「さいかい」である。剥離石器での西海技法、西海新聞、西海学園、西海国立公園、西海橋、西海町、その他長崎市の電話帳をみても「せいかい」と読む例はこの研究所以外に見あたらない。「せいかい」という読み方に次第に違和感を感じるようになった。なぜ「せいかい」なのか？

当所の大先輩である真道重明、伊東祐方、大滝英夫氏にうかがっても、彼らの若かりしころにもすでに同様の疑問があったが、真実は確認できていないとの回答である。昭和29年に第1号を発行した研究所報告ではSEIKAI REGIONAL FISHERIES RESEARCH LABORATORYとなっている。藤谷 超氏によれば、この機会に「せいかい」に統一したのではないかと、それまでは西海水研の人たちも「せいかい」、「さいかい」と様々に呼んでいたように記憶しているが、とのこと。「さいかい」は長崎地方の方言ではないかと、とも。

しかし、戦前からの農林省水産試験場が農林省設置法を改正して24年6月に8海区水産研究所として再発足したときには、すでに「せいかい」であったことはまちがいない。25年3月に水産庁調査研究部研究第一課長から初代所長として赴任された伊藤 憊(たけし)氏は必ずやこの経緯をご承知であったはずであるが、37年3月までお勤めになった同所長に読み方のいわれを直接確認したとの情報は、今までのところ得られていない。

役所的に言えば正式名称は「西海区水産研究所」であって、これを「せいかい」と読むのか「さいかい」と読むのかについて、公的な決まりはないというのが正解のようである。ただし、法律は別で、「遡河性(そかせい)魚類」を慣用で「さっかせい」と過去に読んだことが今日も正式名称になっている例がある。研究所の英名は水産庁漁政課を経由して大臣官房の広報に参考までに通知することがあると承知しているが、これは関係者の業務の利便にという性格のものである。漢字の西の音は、

「セイ」が漢音、「サイ」が呉音であるが、西湖、西施、西洋、西遊(西洋に旅行すること)など軒並みに「セイ」であり、わずかに西方浄土、西遊記、富士五湖の西湖、五畿七道のうちの西海道などが「サイ」の例である。

戦後8海区水産研究所への分立の経緯について、「農林行政史」(第8巻)には次のように記している。「昭和22年12月、総司令部天然資源局長から、農林大臣に対して、水産業調査研究機構の改革が要請された。これによって、農林大臣は左記9名の委員を選定して、これが研究方を委嘱した(委員氏名列記)。前記委員は、数回の委員会を開催して研究を重ね、23年5月5日、農林大臣永江一夫宛に、水産業調査機構改革に関する件を答申した。(以下略)」。この答申の第2項として、「実施機関として8区水産研究所を設置すること(別図添付)」が盛り込まれており、別図での「西海」の受持海区は熊本県から鳥取県となっている。関連する別の資料には委員会の第1回会合に先立ってGHQヘリントン氏のスピーチが記録されており、同氏は委員会にもしばしば出席したとされているので、この際にはSeikai・・・と読まれたのではないかと想像される。

当時のこの委員会の委員でご存命の方は近藤康男先生ただお一人となってしまっていて、百歳を超えた先生に経緯を照会するお手紙を差し上げたが、ご返事はいただけない。そこで、九大名誉教授の塚原 博先生に同様趣旨のお手紙を差し上げてお尋ねしたところ、お答えをいただくことができた。先生は当時から九州大学にお勤めなさっていて、藤永元作研究部長の相談相手でもあった相川教授(藤永元作氏の後を受けて、34年10月~37年1月に水産庁研究部長をお勤めになった)からいろいろと事情を伺っていたとのことである。塚原先生は伊藤所長ともご懇意であったが、この件に関しては直接お伺いしたことはない、しかし、次のように承知しているとのこと説明である。

九州地域に国立の水産研究所が設置されるについて地元での誘致合戦が盛んに行われ、中でも以西底びき網漁業の根拠地であった山口県、福岡県、長崎県がそれぞれ

に熱心であった。結局は23年6月に農林省水産試験場長崎臨時試験地が設置されていたことがベースとなって、24年6月に長崎市に西海水研を設置することとなった。その後25年には福岡、下関、浜（佐賀県）の臨時試験地が逐次設置された。西海水研をめぐる上記3県の誘致合戦はかなり熱したものであったようだ。「さいかい」という読み方は（北部）九州地域に固有のものという通念であり、一方、この研究所の所掌する範囲は更に広く黄海・東シナ海域における以西底びき網漁業をも抱えているところから、東海区、南海区に対応する西海区（さいかいく）としたのだと聞き及んでいる - - とのことである。

農林省設置法の改正の準備過程で、西海区の読み方を水産庁漁政課が決めたことは容易に想像できるが、ある意味でこれは誘致に熱心であった山口県に対する行政的

配慮の産物であるとも取れる。伊藤所長が敢えてこの経緯を語ることがなかったとすれば、あるいはこのような行政的判断があったためなのかも知れない。以西底びき網漁業の主要な根拠地の一つであった山口県の思いは、25年4月の下関試験地の設置とその後の下関支所への格上げ（41年）によって果たされたのであろう。

西海区の読み方が行政的な配慮の結果という一方の根拠はやや意外な感じであるとしても、「さいかい」が「さいかい」よりも広い海域を指すという他方の根拠は、筆者が想定した正解の一つに入っていた。西海水研の創立から半世紀を経て、このことを直接に確認する相手はもはやいないというのは残念なことではあるが、半世紀振りの回答として、ここに記録する次第である。

（西海区水産研究所長）

ニュース102号記事の訂正

ニュース102号の記事「あの木何の木」の末尾で、魚のアコウの種小名 *matsubarae* は松原喜代松博士に由来していると書きましたが、その後、松原新之助先生の誤りであったことが分かりましたので、謹んで訂正します。資料を提供いただいた永澤さん（日水研）に感謝します。ドイツの博物学者 Hirgendorf 博士は1873年から4年近くにわたり東京医学校（現東京大学医学部）の教師として来日し、数学と博物学を教授しました。博士は我が国の計36魚種の新種を発表していますが、滞在中に起居を共にして博士を助けた松原新之助氏に対してアコウの種小名を献呈したのです。松原新之助先生は後に水産講習所（現東京水産大学）の初代所長（1903～11年）をなさった方です。

（嶋津）